

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：13401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580083

研究課題名（和文）平安時代語における非典型的タイプ条件文の記述的研究

研究課題名（英文）The descriptive Study on atypical conditionai-Sentence in Heian period language

研究代表者

高山 善行（TAKAYAMA, YOSHIYUKI）

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門（教員養成）・教授

研究者番号：90206897

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：この研究は、平安時代語の条件文の記述的研究である。条件文には典型的なタイプと非典型的なタイプがある。この研究は、非典型的タイプを対象とする。研究の結果、次の2点を発見した。一つは、条件文と疑問文との親和性である。もう一つは、名詞節とモダリティ形式との関係性である。この成果は古典語教育に貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：This research is a descriptive study of conditional sentences of Heian period era. Conditional sentence have typical types and atypical types. This study covers atypical types. As a result of the research, I found the following two points. One is affinity between conditional sentences and interrogative sentences. The other is the relationship between the noun clause and the modality form. This achievement contributes to classical language education.

研究分野：日本語学

キーワード：文法史 条件表現 中古語

1. 研究開始当初の背景

古代語の条件文は典型的には、「未然形+バ」型式で表現される。これまでの研究では、このタイプの記述が積み重ねられてきた。しかし、それ以外の周辺のタイプについては、ほとんど研究がなく、手つかずの状態である。未開拓領域の開拓が本研究の出発点である。

このテーマに思い至ったのは、モダリティ形式の文中用法の研究である。モダリティ形式の文中用法は、連体用法、接続用法、準体用法に分けることができるが、いずれも条件文と接触するものであり、記述の必要性を感じていた。しかしながら、比較的扱いやすい文末用法の研究を進めていたため、このテーマに向かうのが遅れていたものである。

以上が、研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究では、条件文で周辺のタイプのもを「非典型的タイプ条件文」(以下、「非～」と略記)と呼ぶ。「非～」について記述分析をおこなうことにより、典型的タイプとの比較、相対化をおこなう。そのことによって、古代語条件文の全体像の解明を目指す。

この考え方の前提には、条件文にプロトタイプを設定して、プロトタイプと周辺との対立において捉えるというプロトタイプ意味論がある。

現代語の条件文研究の方法においてもプロトタイプを設定する分析方法がとられ、成果を挙げているように見える。このような優れた現代語文法の方法を援用して古典語の分析を進めていくことは、史的対照による研究であり、将来的に、古典語の成果から現代語研究に貢献することを目的とするものである。一方向的に進めるのではなく、双方向的な研究の方向性を想定している。

3. 研究の方法

(1)中古語を対象として、以下のタイプの「非～」の記述分析をおこなう。具体的には、「～ムニ」「～ムハ」である。

たとえば以下のようなものである。

(～ムニ)

- ・二人して打たむには侍りなむや(枕草子)
- ・まだ明けざらむに帰りぬべし。(同上)

(～ムハ)

- ・帰したてまつらむはかしこしとて、...(源氏物語)
- ・かの西の京にて生ひ出でたまはんは心苦しくなん。(同上)

この他に、「非～」としては、「形容詞未然形+ハ」のタイプもあるのであるが、形容詞の語彙的な問題が関係すると思われ、複雑な面があるため、本研究では対象としないことにする。

これらのタイプを記述し、そのうえで、典型的タイプとの比較をおこなう。資料としては、中古の和文資料を用いる。中心的に用いるのは『枕草子』と『源氏物語』である。

用例調査では、小学館の新編日本古典文学全集を用いる。また、用例の検索については、適宜、「日本語歴史コーパス」(国立国語研究所がオンラインで公開)を利用する。同コーパスのテキストは小学館新全集本をもとにしている。

(2)条件文と疑問文との関係は、従来の研究ではあまり注目されていない。そこで、疑問文との関係について、記述分析を試みる。

具体的には、複文表現において、条件節の帰結に疑問文(反語を含む)が生起する例を分析していくことになる。

図示すると以下ようになる。

(複文表現)

[条件節]+[疑問文(反語文を含む)]

(3)条件文の淵源を探る上では、準体句との関係が重要である。先に挙げた「～ムハ」「～ムニ」タイプを分析するための前提として、準体句とモダリティとの関係についての調査分析をおこなう。

図示すると以下ようになる。

準体句 述語
[m/]+[m/]

(例)

花咲かむは、うれし__。(m)

m はモダリティ形式の生起、 はモダリティ形式の非生起を表す。

準体句については、いくつかの先行研究があるが、準体句内に生起したモダリティ形式の実態や準体句と共起する述語のモダリティ形式については、これまでの研究では明らかにされていない。よって、基礎調査によるデータ作成から始める必要がある。

4. 研究成果

(1)まず、第一点目として条件文と疑問文の関係性を明らかにしたことを挙げる。

疑問文は、複文において条件節の帰結となる。それは、反語においても変わらない。その事実そのものは、先行研究において指摘されており新しくはないのであるが、モダリティ形式に注目することにより、複文表現においては、事態の非現実性表示が重視される実態が明らかになる。

条件文の非現実性と親和性をもつことにより、疑問文それ自身も意味的特徴として非現実性を認めることができる。これは、実は研究開始の時点においては、全く想定していなかったものであるが、条件文の研究が疑問

文研究に貢献する可能性を提示したものであり、今後の疑問文研究につながっていくものと考えている。

なお、この成果についての詳細は、雑誌論文 および研究成果報告書(2017.3)において公開している。

(2)第二点目として、条件文と準体句との関係を捉え直した点を挙げるができる。

従来、助詞「バ」の語源説において、「ム八」を起源とする捉え方はあった。これは、準体句とモダリティ形式との接点を捉えており、条件文とモダリティ表現の連続性を示唆するものであったが、助詞の語源説にとどまるものであった。

本研究では、視野を拡大し、準体句とモダリティ形式との関係を調査分析することで、条件文の淵源を明らかにする道筋がある程度ついたといえる。

また、名詞句研究にも貢献している。準体句内にはモダリティ形式が生起する場合としない場合があるが、どういうモダリティ形式がどの程度生起するかを調査分析することで、準体句の内部構成の分析に役立つ面がある。

さらに、準体句を受ける述語のモダリティを調べ、準体句内部のモダリティ形式との関係を調べることにより、文章中のモダリティ形式の機能を動的に捉えることが出来る。

それに加えて、モダリティ形式が生起した準体句を受ける助詞の分析もおこなっている。

以上をまとめると、下記のような特徴が明らかになった。

(準体句内)

- ・ム系が多い
- ・アリ系が少ない
- ・否定推量マジ・ジが少ない

(後接要素)

- ・ヤ、カは用例が見られない
- ・ゾは用例が見られない
- ・ナムは用例が少ない

(述語部のモダリティ)

- ・準体句とモダリティ形式の組み合わせとしては、「ム」「ムム」が多い。
- ・「ム系 アリ系」の組み合わせは少ない

以上の結果より、今後の研究の進むべき方向性が見えてきたと思われる。

まず、準体句とモダリティとの関係論は今後も進めていくべきである。そのなかで、係り結びとの関係が注目されなければならない。

たとえば、モダリティ形式生起の準体句の後接要素でヤ、カ、ゾが生起しないこと、ナムの例が少ないことの意味が問われなければならないだろう。

逆にいうと、八、モ、コソは生起しうるものであるから、両グループの差異が何を意味するのかを検証する必要がある。

なお、この成果についての詳細は、雑誌論文 および研究成果報告書(2017.3)において公開している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

高山善行, 中古語における疑問文とモダリティ形式の関係, 国語と国文学, 明治書院, 査読有, 93(5), 2016, pp.29-41

高山善行, 準体句とモダリティの関係をめぐって 中古語の実態, 名詞類の文法, くろしお出版, 査読無, 2016, pp.105-119

[学会発表](計 件)

[図書](計 件)

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

本研究の研究成果報告書(A4版全51頁)を2017年3月に刊行している。本報告書の内容は、下記の通りである。

報告書は、「本研究の概要」、「研究編」、「用例編」で構成される。

「本研究の概要」は、研究の目的、方法、成果についてまとめたものである。

「研究編」は、既刊論文3本を収めている(うち1本は研究期間外のもの)。

「用例編」では、調査資料とした『枕草子』『源氏物語』の「~ムニ」節、「~ム八」節の用例を挙げて、データを提示している。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高山 善行 (TAKAYAMA, Yoshiyuki)
福井大学・学術研究院教育・人文社会系部
門 (教員養成)・教授
研究者番号 : 90206897

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :

(4) 研究協力者

()